

出し得うること」「芝居では不可能な場面をも示し得る」ことに求め、それが「偉大なる民衆芸術として西洋人に示し得るに至る」と、映画がそれ自体として持つ大衆性を称揚している。

*10 註5引用箇所

*11 秦恒平「谷崎潤一郎論」(花と嵐)昭和四十七・九 筑摩書房、但し引用及び参照は昭和五十一・十一に筑摩書房から発行された「谷崎潤一郎―源氏物語」体験」所収版に拠る)

*12 ここでの語義は「マゾッホとサド」(蓮實重彦訳 昭和四十八・七 晶文社)に於けるジル・ドゥルーズの用法に倣う。

*13 これが朔太郎をして、「徹底的にエゴが強く、主観の欲情するものを決して捨てない」西洋芸術家に谷崎を比せしめた所以でもあろう。

*14 中根隆行「谷崎潤一郎「陰翳礼讃」における大衆文化の表象」(国文学研究資料館紀要)平成十・十)は、谷崎に於ける「陰翳の美」が「大衆文化に対するイロニーの所産」であると述べている。

中河與一の偶然論と『愛戀無限』

山崎義光

本稿では、昭和10年に提起された中河與一の偶然論について概括し、それが『愛戀無限』が書かれるにいたって、いかに展開されていったかを論じてみたい。これまで、偶然論について論じられる際には、中河の一連のエッセイの要点を指摘するか、あるいは、同時代の議論との関連を指摘するという観点から論じられてきた。だが、中河與一は、小説を書くことによって、思考していたのではなかったか。本稿では、評論／小説といった言説ジャンルの枠組みを越えて、中河の論理展開を跡づけてみたいのである。

プロレタリア文学派内の文学大衆化論議から派生した、プロ派と形式主義派の論争後、プロ派は外圧と内部からの批判によって運動としては退潮していく。他方、昭和十年前後に至って、転向、自意識の問題、不安の問題、行動主義、日本浪漫派、私小説論、純粋小説論等々が提起された。こうした昭和十年前後の状況の中で中河の偶然論は提起されている。

偶然論の要点は、諸科学の提示する、法則(必然)を絶対視する立場に対して、現実には不思議が充ちており、出来事は常に法則にはおさまりきらない予測不能な偶然によって生成するのであって、その偶然を驚きとして感

受することが生を豊饒たらしめるのだと主張するところにある。その傍証として、旧来の思想の基底にある思考の型の批判として、古典力学的因果律に疑義を呈していた、量子力学の不確定性原理を挙げ、またベルグソンによる純粹持続による創造的進化論等々を挙げる。この偶然論は、形式主義論争の発展である。形式主義論争の際の論敵であったマルキシズムの理論的根幹にあるのが「必然論」であるとし、それに対して「偶然論」を提起しているのである。しかしながら、マルクス主義・プロレタリア文学批判が目的であったわけではなく、中河は自らの偶然論を「今日行動主義といふのも、浪漫主義といふのも、等しくこの偶然論的立場に於てのみ説明せられ、鞏固なる論理的立場を与へられる」（『偶然文学論』昭和10・7『新潮』）と位置づけた。自らの偶然論を、当時出されてきた諸々の問題提起や主張の基底にある問題として位置づけ、偶然性を梃子とした新たな思考の枠組みを提起しようとしたのである。

中河が偶然論を提起したのとは同時に発表された横光の純粹小説論は、それが形式主義論争以来の論脈を引き継いでいることはもちろん、中河の評論が文学に限定されない一般的偶然論としての傾きが強いのに対して、小説論としての偶然論とも言いうる論点を含んでいる。横光の小説実践に基づいた、小説論としての偶然論に対して、中河の偶然論に顕著なのは、論じ方が抽象的に傾き、ロマン主義的なバイアスがかかっていることである。「吾々は嘗て吾々の生活が一度でも必然的に動いた例を知らぬ。／吾々は常に希望を持つて生きてゐる。聡明なあきらめよりは、より多く不聰明の希望によつて生きてゐる。時間といふ不思議な流れの中にある。何かの未来を常に憧憬することを止めない」（『偶然文学論』）と述べる中河において、必然論の否定は「何かの未来を常に憧憬すること」として把えられている。「ロマン心情と偶然論」では、「私は今日の浪漫心情といふものを吾々の立場に於て考へたい。即ち吾々はこの心情に於て長い間の必然的世界観を破つて、飛びゆく現実として現実を見る。宇宙を変化し創造するもの連続として見る。薔薇の花が薔薇の花を開くのは必然の法則であるよりも、一つの驚きとして吾々の心の眼に訴へると考へる」と述べている。それゆえ、リアリズムに対しても、次のように述べ

ることになる。「私は嘗て「現代のリアリズムは真実の持つ不思議を追窮する事である」といつた。／だがこの言葉は同時にロマンチズムの主張に転化するものである。／なぜならば、この命題は、不思議を強調すればロマンチズムになり、真実を強調すればリアリズムになるからである。だがもつと適切にいへば、今日ではこの二つのイズムが偶然論において強力に結びつけられなければならないのである」（『偶然の毛鞠』昭10・2／11『東京朝日新聞』）。

二 中河與一の偶然論とロマン主義的な愛の機制

さて、偶然論の概要は以上のようなものだが、本稿において注目したいのは、中河が、次のように述べている点である。

吾々は吾々の芸術に於て、心臓を、生活を、社会を、再び偶然の事実によつて見なほし、生き生きとそれを感じ、蘇生せしめなければならぬ時代に到達した。斯くの如くにして吾々は始めて吾々の生活に希望と絶望の鼓舞を与へるのである。未来を空想して現実を切実に生きるもの、それは恋人達だけではない。偶然の論理に於て吾々は始めて未来と現実とを豊富に生き、吾々の日常を永遠につなぐのである。（『偶然文学論』）

すなわち、「未来を空想して現実を切実に生きる」という「偶然の論理」の体現者として「恋人達」をあげている点である。というのも、たしかに偶然論を展開していた一連のエッセイでは、恋愛についてとりたてて主題的に論じてはいない。だが、偶然論を発表した後、典型的な「ロマン主義的な愛」の物語と見なしうる、『愛戀無限』『天の夕顔』を書き、エッセイにおいても、しきりに「愛」について論じていくことになるからである。

偶然論と恋愛の形象化にはいかなる繋がりがあるのだろうか。大澤真幸[★]は、近代的な恋愛の原型となる「ロマン主義的な愛 (romantic love)」を定義するのは、①愛が、「相手の外面的な特徴ではなく、内面的なへ主体性Ⅱ主観性」(他者の独自の世界観・価値観) そのもの」に向けられること、そして、②「真の愛は結婚の永続的な結合へと収束するはずのもの」と観念され、また結婚は、ただ愛のみを根拠にして正当化されるに至る」こと、という二つの条件をあげる。そして、このような愛は、「恋愛する者が、一方で、自己を関係の内に埋没させ、恍惚へと至りながら、他方で、その関係を反省するアイロニカルな態度を保つことができる」とき、すなわち「内在的な視点(恍惚を導く)」と「超越的な視点(反省を導く)」という二重の視点による「(愛の)関係の自己準拠性」によって形成されると論じている。この二重の視点は時間的な偏差によって成り立つ。時間的な持続の中で、気まぐれな情熱(内在的な視点)に対して、予期される変更可能な未来までの展望を与える超越的な視点によって、愛の同一性が保障されるわけである。しかも、注意しなければならないのは、「永続的な結合」が目指されながらも、他者他者性が、自己の志向性を逃れていく限りにおいてのみ、言い換えれば自己把持の不可能性においてのみ顕現するのであるがゆえに、愛は、逆説的にも、上記①②の条件が十全には実現不可能であることを条件としているのである。以上のようなロマン主義的な愛の機制と偶然論とに通底する性格を示してみよう。

まず、中河が、「未来を空想して現実を切実に生きる」「恋人達」と述べて、偶然論を恋愛と結びつけていたのは、未決で不可知の稀有な可能性が現実世界を生き生きとしたものにする——「未来と現実とを豊富に生き」——ということであった。ここには、かなり楽観的なかたちで、へ主観性Ⅱ主体性へ向けられた偶有的な関係が、時間的な偏差によって超越的な視点を導き入れて成り立つものだというロマン主義的な愛の機制と通底する認識が示されている。そして、中河が「偶然の論理において「中略」吾々の日常を永遠につなぐ」と述べていたときの、「偶然の論理」を「恋愛の論理」と置き換えれば——恋愛の論理において吾々の日常を永遠につなぐ——、あくまで偶有的でありながら、そのままに「永遠」たらしめられていくという論点と、②「結婚の永続的な結合へ」と収束するはずのものとして観念され」という点とが対応する。そのことこの社会制度的な実現は「結婚」ということになりそうである。しかし、恋愛は互いに相手のへ主体性Ⅱ主観性へを愛そうとする根源的には不可能な試みであるのに対し、結婚は二人の関係を第三者によって承認してもらおう契機を含むがゆえに、偶有的な人間相互の分裂・孤立した関係が社会へ包摂されるのであるとともに、純粹に理念的なロマン的結合からの後退にもなると考えられる。それゆえ、「恋愛」と「結婚」とは区別しておく必要がある。

三 ロマン主義的な愛の物語としての『愛戀無限』

『愛戀無限』が書かれるにいたって、偶然論がロマン主義的な愛の物語として形象化されて展開されていくのは、彼の偶然論の核心が、ロマン主義的な愛の物語によって、よく形象化されうると考えられたからであったろう。それによって、形式主義論から偶然論へと展開されてきた中河の思考の歩みは、新たな転回をみせることになる。

『愛戀無限』は、偶然論が一段落した後の、昭和10年12月11日から翌11年4月20日まで『朝日新聞』紙上に連載された。この小説は、その題名が、先に述べたロマン主義的な愛の定義と、「愛恋」Ⅱ①・「無限」Ⅱ②と対応していることに端的に見てとれるように、典型的な「ロマン主義的な愛」の物語であるといえる。

『愛戀無限』は、店の状態の傾きつつある繁野医療器械店の娘智子と競馬の騎手志村典雄との恋愛を主軸として展開する。智子が牧場で乗馬しているのを、志村が心配して追いかけて来たことから、二人は偶然に知り合い、しだいに接近していく。智子は、阿曾汽船会社の息子元喜と、眼科医の息子で医学生生の菊岡一郎から求婚されるが、それらの接近をかわしてしまふ。智子は、男は「結婚してゐるうちに大抵あきが」きて、「しまひには、他の女を思つてゐる男の世話をするだけが奥様のお役目になる」がゆえに結婚をしないという「結婚否定論者」な

のである〔結婚哲学〕四 18)。一方、志村にも騎手の倶楽部の女事務員せんが言い寄る。だが、志村は「到底及ぶべくもない身分の相違」〔名馬エクリプスの夢 二 41〕があるとは思いなながらも智子へ思いを寄せる。そして、智子・志村・元喜ら友人仲間の小笠原への旅行を契機に、志村と智子は互いの愛を確かめる（「海への誘い」）。その後二人は、智子の家の別荘で密会するようになる。だが、二人の気持が近づいていくにもかかわらず、智子は志村に「でも、わたくし、結婚は誰ともしないつもりよ。」と告げるのである（「草のいほり」三 82）。

「身分の相違」といった属性を度外視し、偶然に知り合った互いの「主体性Ⅱ主観性」を愛し合おうとするという意味では、志村と智子の関係は、ロマン主義的な愛の条件①に合致するといえよう。そして、智子は結婚しないと断言している。しかし、だからといって、智子は二人の関係を仮初めのものでしかないとも考えておらず、むしろ永続的なものであることを望んでいる。二人の関係が永続的であることを望みつつ、しかし結婚は否定するといふ智子の立場は、智子が志村に結婚するつもりはないと告げる前に、別荘にあった瓦枕に描かれた、王と姫の絵を見て「わたくし逢いたい人が昔もゐたのね。でも絵になつてまで愛しつづけてゐる人達、うらやましいわ」（「草のいほり」二 81）と言う場面に示されている。絵に描かれた愛する二人は静止して永遠に結ばれているというわけである。智子は「主体的Ⅱ主観的」に愛することに忠実であろうとして、それに背反する結婚を肯んじないのである。そして、典雄にも「愛しあつてゐながらすぐ結婚を考へないといふことに、なにか愛情の純粹な形があるやうに思はれて来」るのである（「草のいほり」四 83）。

だが、そうして他者の承認なしに、互いの「主体性Ⅱ主観性」にのみ向けられた関係は、互いに疑念を呼び起こし、不安をかきたてることにもなる。「でも何時までも、御一緒にゐられるかしら」／今度は、何かの不安に襲はれるやうに眩いた。／恋人達の心といふものは、何時が来ても、新しい不安を、何かのきっかけに、常に見つけるものらしかった。／「わたくし、その事を考へたら、急に悲しくなつたの」（「草のいほり」五 84）。そして、このち智子は、没落していく家（会社）のために結婚することを考えることになる。

繁野医療器械店の経営が悪化し、債権者からはなんとか逃げるのだが、智子は家（会社）の再建のために結婚を考え始める。母兼子は、志村と智子では「身分が違ふ」という。「そこで彼女は思ひきつて、菊岡一郎と結婚してみようかと考へた。結婚といふ事を余り愛情的に考へてゐたことが、何か人生といふ強い事実にあてはめると、ひどく空想的で、子供っぽい思ひがちであつたやうな、気がしないでもなかつた。結婚といふ最も大きい人生の制度には、あらゆる係累と、愛情と、かけひきとが含まれてゐてこそ、強固であるに違ひない。〔世の中には互ひに飽き飽きし、憎みあつてさへゐる夫婦がゐる。然も彼等をつないでゐる何かを考へてみる必要がある。〕」と智子は思うに至る。「それに典雄との愛情も、思つてみれば、もう十分に傾けつくしたといふ気がした。この上彼女達の上に待つてゐるものは、平和な愛情で、それは世間の人のよくいふ、倦怠といふものにならぬとも限らない。若し千度に一度、そんなことがあつたとしたら。それは、まあ自分達にとつて、どんなに悲しい事だらう。』そして智子は「自分の愛情を生き生きとさしておくために、自分はいつそ、悲しい結婚をしてみようかしら」と思うのである（「結婚大切」五 92）。こうして智子は結婚の支度を始める。一方志村は智子との別れがはつきりすると、繁野医療器械店の社運も賭けられた、大障碍物レースに向けて専心する。レースには智子も、母や外山支配人とともに観戦しに行く。スタートからエミリードに跨がる志村は先頭を走るが、「その時、典雄の心には、既にゴールに近い余裕が出来、それが彼をして観覧席の方をチラッと見させた」。その瞬間、馬が足を引っかけた落馬する（「乾坤一擲」一 100）。この後、兼子と智子は財産を整理して、瀬戸内海の小さな島へむかい、そこで静かに住むこととなる。そこへ至つて、他の者と結び合うことも有り得た偶有的な関係であつた智子と志村の関係は、「運命」として感受されるにいたるのである。ここで注目したいのは、最終章「孤島の人々」が、瀬戸内海の風景（自然）とともに構成されていることである。

偶然に生じた関係が、運命として感受されるようになること。このことを考えるために、少々迂回路をとりた

四 九鬼周造における偶然性と「運命」

中河の思考の歩みは、同時代の哲学者九鬼周造の営みと平行しているようで興味深い。すなわち、性愛論（「いきの構造」・偶然論（「偶然性の問題」）・文学論（「文芸論」）という主題群に対する基本的な発想においてである。ここでは、「愛戀無限」を解析する上で必要な論点を参照したい。というのも、一つには、偶然性と運命との関連の問題を整理するためであり、他方で、中河と九鬼とに同時代的に共有された問題意識を示すことにもなると考えられるからである。

九鬼は偶然性について次のように規定している。「偶然性の根源的な意味は、一者としての必然性に対する他者の指定といふことである。必然性とは同一性すなわち一者の様相にほかならない。偶然性は一者と他者の二元性のあるところに初めて存するのである」。「一者と他者の二元性のあるところに初めて存する」という偶然性の規定を、「いきの構造」の男女関係にあてはめていえば、「一元性の自己が自己に対して異性を指定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」「媚態」を基調としながら、この二元的な可能的関係が決して永続的で確固とした関係たりえないという「諦め」と、「媚態の二元的可能性に一層の緊張と一層の持久力とを呈供し、可能性を可能性として終始せしめようとする」「意気地」という三契機によって構成されるという、「いき」の規定とも通底する。これは、他者の他者性を自己把持することの不可能性を条件として初めて可能になるという理念的な意味でのロマン主義的な愛にも近接する認識が前提となっている。

しかし、九鬼のいう「いき」とロマン主義的な愛が異なるのは、ロマン主義的な愛では、相手のへ主体性＝主観性）そのものを愛し、「永続的な結合」を、究極的には不可能でありながら、さしあたって理念的には目指されるのに対し、「いき」は、そのような究極的な結合が予め不可能なものとして「諦め」られた上で、二元性を

維持した「媚態」によって誘惑し漸近しあい、また、それに抗する「意気地」によって原動化される遊戯だという点である。偶有的な双対的關係として成立しているとすると共通するのだが、「ロマン主義的な愛」が一元化を志向するのに対して、「いき」は一元化の不可能を予め前提にしているのである。「いき」の特質は、究極的な一元化を志向することの断念から、関係の仕方そのものを戯れようとするところにある。そこに近代的な恋愛のアポリアへの批判意識もあった。

「いき」は安価なる現実の提立を無視し、実生活に大胆なる括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら、無目的なまた無関心な自律的遊戯をしている。一言にしていえば、媚態のための媚態である。恋の真剣と妄執とは、その現実性とその非可能性によって「いき」の存在に恃る。「いき」は恋の束縛に超越した自由なる浮気心でなければならぬ。

この違いは、九鬼の論じる「いき」が、現実的な恋愛が「諦め」られた領域で——「安価なる現実の提立を無視し、実生活に大胆なる括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら」——、形式化された男女間の関係であることによって可能になる。「いきの構造」の四・五では、「いき」の「自然的表現」・「芸術的表現」について詳細に論じているが、それは、「いき」が巧妙な表現形式の回路を通じてはじめて、偶有的で二元的な関係の「自律的遊戯」を可能にするからであらう。

しかし、ここでは「いき」の特異性の方ではなく、九鬼の性愛関係の認識の前提が、先に述べたロマン主義的な愛と通底するものであることに注意しておく。すなわち、「一者と他者の二元性のあるところに初めて存する」という偶然性の規定が根底にある点である。そこから、「偶然性の問題」で論じられている、偶然性と「運命」との関係に着目しておきたい。

『偶然性の問題』において、偶然性は「運命」へ転化すると論じられている。『偶然性の問題』は、一般概念に對する「個物および個々の事象」としての定言的偶然、「一つの系列と他の系列との邂逅」としての仮說的偶然、全体のもつ同一性に対する、部分の、この部分でも彼の部分でも有り得るといふ可能的な關係としての離接的偶然という三つの次元で論じられている。「運命」については、主に離接的偶然を論じる際に言及している。まず、「離接肢は離接的諸可能性の全体を予想してゐる。然るに諸可能性の全体といふことは究極的には形而上的絶対者の概念へ導く。絶対者は絶対者なるが故に絶対的に一と考えられる。また絶対的に一なるが故に絶対的に必然と思惟される。この絶対的必然を形而上的必然と呼ぶことができる」。

「運命」は、全体と部分の逆説的な關係から導かれるものである。この逆説は、經驗的（仮說的）地平と形而上的（絶対的・離接的）地平との区別から生じる。經驗的な（仮說的）地平における偶然性は、「一つの系列と他の系列との邂逅」として生じるが、その邂逅にも全く原因が考えられないものではない。しかし、その因果的な系列を無限に溯つたとしても、それ以上は原因に遡及できない原始偶然へ到達する。それを形而上的（絶対的・離接的）な地平（形而上的絶対者の見地）からみれば、全体の一元性ゆえに絶対的必然と見なしうる。逆に、經驗的な地平における因果的な系列としての必然性は、原因によつて（他の者によつて）規定されており、それを形而上的な地平において見れば、その他の者（原因）は別の者でもありうるがゆえに、偶然である。

ここに逆説が生じる。經驗的な地平における「偶然が人間の実存性において核心的全人格の意味を有つとき、偶然に運命と呼ばれるのである」。すなわち、經驗的な地平において偶然として感受される出来事も、他では有り得ない「全人格の意味を有つとき」には、——形而上的な地平へ観点が転じて——「運命」と呼ばれるのである。この意味での「運命」は、後の「日本の性格」と題した講演では「自然」として論じられる。田中久文が指摘するように、「九鬼においては、この世の偶然——必然的構造が水平的な視点からみられた時には「自然」という形で捉えられ、それが「形而上的絶対者」との關係において垂直的な視点からみられた時には「運命」とし

て捉えられているのである」。

以上のような、九鬼による、偶然性から「運命」「自然」への転化についての論点を踏まえて、『愛戀無限』の結末を振り返ってみよう。

五 『愛戀無限』の最終章

次に引用するのは、最終章で、智子が瀬戸内海の孤島へ向かう途中の風景を眺めた場面である。

岬と見れば島。島と思へば陸地。一つにしてみると、（それは二つに別れ、二つと思つてみると、）何時かまた一つに連らなり、船の進行とともに、島々は千変万化する風景の魔術を、限りもなくすり変へた。

呼べば答へさうな島の中の人々。思ひがけなく島かげから現れてくる白い帆かけ舟。船の進行につれて飛び移る悲しげな鷗の群。

「寒くは、ないですか」

「でも動けませんわ」

さう云つたまま、智子は、ほんのこの間まで、烈しい人生の運命を眺め（つづけ）てゐた双眼鏡の底に、今は慈愛にみちた自然の風景を、見つめてゐるのであった。

（「孤島の人々」一 126）

偶然の出来事の積み重ねによつて起きた、これまでの過去の出来事総体を想起する現在の地点からは、過去の出来事は、他ではあり得なかつた事として感受されているがゆえに、「運命」として観じられているのだといえるだろう。先の九鬼の論点を借りていえば、過去を「運命」として眺める現在の地平は、現在の地点が、過去に

対して相対的に、形而上的な見地にたっていることを意味している。しかも、これまでの変転を続けた「烈しい人生」(傍点は引用者)の出来事は、「千変万化する」「慈愛に満ちた自然の風景」(傍点は引用者)へと置き換わって眺められていることも同時に描出されている。眺められているのが「自然の風景」であることは、過去の総体に対する現在の地平が、相対的に形而上的な地平となるに過ぎず、あくまで同じ経験的地平にあることを意味し、運命を他ではあり得なかつた(自然)として受け容れていることを示しているものと解せよう。

また、智子と同様、その後、志村もこの孤島へ来て療養することとなり、次のように語る。

「僕は今、馬から落ちたことを、非常に幸福に思つてゐます」

典雄が突然低い声で呟いた。

「あなたが若し、あの時お死になつたら、きつと、わたくしも、もう死んで居りましたわ」

「馬から落ちなかつたら、僕はもうあなたと逢へなかつたかもしれない」

典雄の心には、一瞬間、高潮した運命への感謝が、泣けさうなばかりに湧いて来た。

「そんなことないわ。でも、やつぱし何かがわたくし達を一緒にしてくれたのね」^{*16}

〔孤島の人々〕四

129

一瞬のよそ見で、偶然にも、智子と視線をあわせ落馬したことが、二人を再び結び付けることになるという結末には、偶発的な出来事であつたにもかかわらず、「一瞬間、高潮した運命」のはたらきによつて「わたくし達と一緒にしてくれた」、他ではあり得ない運命として感受されるという、智子の場合と同様の認識が読みとれる。小説の最後は次のように結ばれている。

冬の海は荒涼としてしづきつづけ、灰色に明けて、灰色に暮れる日が多かつた。

然し彼等の心にある切ないたはりと、感謝の心が、ボタンの穴にもつれるボタンのやうに、完全な心の一致で、二人を幸福にしてゐた。

智子と志村は、ともに彼等の身に起こつた偶発的な出来事を運命として感受するにいたる。それは、九鬼流に言えば、経験的な地平において偶発的な関係が、「人間の実存性において核心的全人格の意味を有つ」がゆえに、「運命」(自然)と呼ばれるのである。「愛恋無限」の結末が、瀬戸内海の自然の風景の中に包摂されるものとして形象化されているのは、偶然の運命への転化を、他ではあり得ない(自然)として感受しているのだと解せる。「荒涼とし」た「冬の海」は、予測しがたい天気の変化を含蓄し、「ボタン」ははずれる可能性をも意味しており、あくまで今後も二人の関係が偶発的に変化する可能性が暗示されているが、さしあたって物語の終りは「完全な心の一致」で収束している。

六 中河與一の偶然論の陥穽

偶然論は、真銅正宏^{*17}の指摘するように、自然科学や哲学といった学問分野として分化した区分を横断した議論を提供し、また、小説像の固定化を批判することで、「あらゆる「常識」を支えている我々の知的基盤への不信」を表明したという、当時の全体としての論調に対して超越的な批判を加えた意義を認めることができる。だが他方、偶然論が、「愛恋無限」によつて展開されたとき、偶然が運命へ転化する、ロマン主義的な愛の論理に従順な物語として形象化されることになった。

中河の偶然論に対しては、因果律をめぐる不確定性原理の理解や唯物論的な弁証法の理解などをめぐって様々な反論が寄せられたが、その中で森山啓は、次のようなことを述べていた。

しかしながら又、プロレタリア文学の方面でも（プロレタリア文学に限ったことではないが）、過去においては、必然性や法則といふものを機械的にしか理解してゐなかつた時もあった。たとへば初期のプロレタリア絵画において、労働者を描けば必ず眼を怒らし口をあけて絶叫してゐなければならぬかのやうなポスター絵だけが流行したが、文学においても労働者と資本家の類型、善玉と悪玉とが描かれる傾きもあつた。事件を描いても、争議はつねに勝利するものであつたり、演説すればその効果がテキ面でなければならなかつた。歴史法則や、歴史的必然性といふものは、こゝでは、作家の頭脳のなかで絶対不可変なものとして硬化し、それによつて生ける世界を律した。マルキシズムにおいては、自然法則も歴史的な法則も決して絶対不可変なものとは考へられて居ず、法則自身の相対性、歴史的変性が力説されてゐることはいふまでもない。

〔作家の世界観の一問題としての「必然」と「偶然」〕 昭10・10『文学評論』

ここで注目したいのは、かつてのプロレタリア文学において、ある種の理念（必然性や法則）に合致すると見なされる定型があつたと指摘していることである。それに照らして、文学論としての中河の偶然論を捉えてみるならば、ある種の硬化した理念的定型に偏することへの批判としてあつたはずではなかつたか。しかし、そのような意味での批判が、中河の小説において実践されていたと言ふことは留保しなければならぬ。

中河は「偶然文学論」の最後に、横光の純粹小説論に言及し、偶然性は横光のいうように、通俗小説の特徴ではなく、寧ろ本當の小説の要素であると修正する。そして、小説に引き入れられるのは「眞実の不思議」によつてであるとし、「フローベールはボヴァリー夫人とレオンとの不思議な邂逅によつて小説を高潮さし、愛情といふものの無限の帰結を破産といふ結末によつて報酬した。モウパッサンは「脂肪の塊り」に於て、正義感といふものを食欲と賣笑といふ二つの条件で無惨に回転させ、ゲーテはキルヘルムとマイヤーネとの恋愛からその教養小説を初めてゐる」と具体例を挙げている。注意しておきたいのは、ここでいう偶然は、出会いや出来事と

いつた物語世界内の次元での偶然性を言つてゐる点である。先に論じてきた「愛戀無限」をみるかぎり、物語の展開上、物語世界内の登場人物の偶然の出会いや出来事が描かれている。だがそれとは別の次元で、プロット展開の総体はロマン主義的な愛の機軸の定型を踏襲したものであることを無視できないだろう。これを、先の九鬼による偶然性の運命への転化の論理になぞらえていえば、物語世界内の次元（経験的な地平）での偶然性は、物語の外部に立つ地点（形而上的な地平）からみれば、ロマン主義的な愛の物語の定型の枠を踏み越えることがないのである。

この後の中河は、「愛」や「永遠」の重要性を説くことになる。^{*18}個人主義思想や唯物思想の発達によつて生まれた純粹な愛への軽蔑の風潮に対して、本来愛が尊重されるのは「自己を捨て、更らにそれ以上のものを求める心理を認める事が出来る」からであり、個人の欲望にかかりつつも、「その欲望が自己を越えしめるところのものであるところに主点がある」のであつて、「全体を考へて生きる」といふ事こそ愛の原理に立つ生活態度であり、人が隣人を考へ自分以外の者の存在を考へて、その全体のバランスをとらうとするものが全体主義であるならば、全体主義こそは愛の思想の上に立脚するものである事がわかる筈である」と述べるにいたる。^{*19}

新感覚派の作家として活躍し、形式主義論争・偶然論争においては、「驚き」や「飛躍」「思ひつき」の効用を述べ、リアリズム・プロ派の表現の定型化を批判して、旧來の思考の型を超越的に批判したはずの中河與一が、他方で別種の定型的な論理に捕らわれるという偶然論の陥穽があつたのではなからうか。

注

*1 四宮正貴「中河與一における偶然論——その預言的性格——」〔國學院雜誌〕76・2 一九七五・二

*2 笹淵友一「偶然文学論」とその文学史的意義（笹淵友一編『中河與一研究』右文書院 一九七〇・五）。真銅正宏「昭和一〇年前後の「偶然」論——中河與一「偶然文学論」を中心に——」〔同志社国文学〕43 一九九六・一、「偶

然という問題圏——昭和一〇年前後の自然科学および哲学と文学——（『日本近代文学』59 一九九八・七）。中村三春「量子力学の文芸学——中河與一の偶然文学論」（『日本近代文学と西欧』翰林書房 一九九七・七）。

* 3 拙論「形式主義論争の争点」（『日本文芸論稿』23・24合併号 一九九七・二）

* 4 「ロマン心情と偶然論」（『偶然と文学』第一書房 昭10・11）

* 5 大澤真幸「貨幣の可能性と愛の不可能性」（『性愛と資本主義』青土社 一九九六・七）

* 6 後に、保田與重郎が「エルテルは何故死んだか」（昭13・3『文学界』）で論じたのも、このような恋愛と結婚の背反についてでもあった。

* 7 中河與一「愛戀無限」の本文引用は、『東京朝日新聞』の初出から。（一）内には、章題と、算用数字で連載回数を記した。引用に当たって旧字体は適宜新字体に改めた。引用文中の「/」は、本文中の改行である。なお、最初の単行本は、『愛戀無限』（第一書房 昭11・5）である。初出との間に、多少の加筆が認められる。本稿では、立論にかかわる範囲で、単行本において加筆されている本文を引用の際には「（一）」内に記し、異同があった場合には、注に示した。

* 8 単行本では、「でも、わたくし、結婚なんて認めてゐないわ」となっている。

* 9 単行本では、「その時、典雄の心には、既に勝利の確信が現はれ、その余裕が彼をして観覧席の方をチラッと見させた」となっている。

* 10 九鬼周造「偶然性の問題」（『九鬼周造全集 第二卷』岩波書店 25頁）。

* 11 九鬼周造「『いき』の構造」（『九鬼周造全集 第一卷』岩波書店）、「『いき』の内包的構造」。なお、九鬼の「いき」の構造」と「偶然性の問題」との関連については、田中久文「九鬼周造 偶然と自然」（ベリかん社 一九九二・九 114～115頁）に指摘があり、これを参考にした。

* 12 前掲*11「『いき』の構造」 22頁

* 13 前掲*10「偶然性の問題」 25頁

* 14 前掲*10「偶然性の問題」 24頁

* 15 田中久文前掲書*11 161頁

* 16 引用箇所中の「典雄が突然低い声で呟いた。」の部分が、単行本では、「低い声で何かの摂理を思ふやうに、典雄が突然呟いた。」と訂正されている。

* 17 真銅正宏前掲論文*2「偶然という問題圏」

* 18 「愛戀無限」の序（『文藝不断帖』人文書院 昭11・7）で、中河は「今日の時代ほど永遠の思想に欠乏してゐる時代はないのではなからうか。人は多く打算と安逸の中にあつて大胆な冒険を願はず、無味と乾燥の生活に馴れて飛躍をわすれがちである。例へば恋愛を描いても、瞬間の享樂に流れて、永遠の熱情を所期しない。（中略）非力ながら私は一般人の支持によつて、この小説の中で新しい永遠を創造し、その完成を期したいと思つてゐる。」と述べている。

「愛の意味」（錦城出版社 昭17・4）所収の「愛の意味」「愛の物語と倫理」「愛と世界観」などを参照。

* 19 前掲*18「愛と世界観」「愛の意味」 260頁